

## 推薦のことは

今、世界は大きく変わっている。急速にフラット化するグローバル世界は、人口増加、富と成長の偏在、地球資源と環境の限界など地球規模の重い課題を人類に突きつけている。

そして、医療もその例外ではない。

「医療改革＝ヘルス・リフォーム」は、今まさに世界共通の重要課題となり、その成否が国民の健康と国の財政、経済成長、社会の安定、ひいては国際関係と世界の帰趨にも影響を与えるグローバルイシューとなっている。その潮流の中で、途上国から先進国まで、世界中の国がよりよい医療を目指して試行錯誤を重ねている。

一国の医療を動かすときには、財政上の制約や価値観の違いを反映し、さまざまな利害が衝突し、時には政権をも揺るがす大問題となる。こうした医療改革のプロセスでは、プリンシプル(基本的理念)をベースとした大きなビジョンに基づく政策立案ときめ細かな実行、そして各層の強いリーダーシップが決定的に重要だ。

本書では、それらの多様な側面をいくつかの視点で切り取り、可能性のあるアプローチが余すところなく、そして筆者らが実際に直面した世界各国における数多くの医療改革プロジェクトで得られた苦闘をもとに示されている。こうした世界の改革事例は、我が国の医療政策を「知の鎖国」から解き放つ示唆にあふれている。

本書から読み取れるように、真に国民が必要とする医療を実現するためには、幅広いステークホルダーを巻き込み、客観的なデータに基づいた政策の選択肢をオープンに議論し、責任ある決定をする、成熟した民主主義プロセスの確立と、それを可能にする市民社会の創造が不可欠だ。私が主宰する日本医療政策機構(Health Policy Institute, Japan; HPIJ <http://www.healthpolicy-institute.org/>)という民間シンクタンクも、まさにこのことをミッションとして非営利・中立・超党派で活動している。

本書が提示する、倫理的な価値判断の枠組み、結果志向、変革の政治学、政策分析手法、全章を通じて強調されている政治・世論・政策決定プロセスの重要性、そして、医療改革に挑む世界各国の豊富な事例は、我が国の医療政策が、いままさに必要としているものばかりだ。米国留学中に著者の薫陶を受け、本書に出会い、日本の医療改革に役立てたいとの思いから本書を翻訳し紹介した訳者諸君、指導に当たった監訳者諸氏の努力も特筆したい。

ここ数年、医療制度について書かれたいくつかの画期的な著書が出ている。本書は医療制度の多様な側面を、実に丁寧に、時には具体例も示しながら、広く、深く分析、考察している点で他に見られない普遍性と、また、それぞれの国の事情で進めていく手立て、手順について多くの示唆を与えてくれる。

およそわが国の医療をよくしたいと考える関係者には、政府関係者ばかりでなく、患者、市民、医療従事者、メディア、財界、政策立案者などの立場を超えて、必読の書となるだろう。

政策研究大学院大学教授、東京大学名誉教授

特定非営利活動法人日本医療政策機構 代表理事

日本学術会議会長(2002-06)、内閣特別顧問(2006-08)

黒川 清